

STAY OR GO

SUMIKO

BAND

SYNTHETIC MUSHROOMS

シンセティック マッシュルーム

SYNTHETIC MUSHROOMS

新潟を拠点に活動しているバンド

メンバーは

松永 和有希 (ボーカル・ギター)

中村 太郎 (ギター)

寺崎 経幸 (ドラム)

(写真撮影時、ベースはサポート)

問) <http://webs.to/risky/>

025-229-6284

次回 LIVE 6.10 渋谷 DESEO

7.9 渋谷 DESEO

7.16 池袋 CYBER

PHOTO: 2.24 渋谷 DESEO⇒



初めてこのバンドに出会ったとき、ステージ上から渾身の思いの詰まった強力な音に塊に、思わず両足を踏ん張ってしまった。別に反骨的なことを歌っているわけではないのに、何かを訴えかける力を強く感じて、改めてステージに向き直したのを憶えている。

それが特に目を引く格好をしているとか、目つきが鋭いなどという容姿ならば、そういう音楽を少しは予想しただろう。いつステージに出てきたかも分からないくらい自然に目の前に現れてそれをやられたので予期せぬ出来事に面食らったのである。

音楽を多くの人に聴いてもらおうと過剰に外見を意識したり、笑って聴き手の心をひきつけたりと、聴いてもらう為の努力が色々ある。それは悪い事ではなく、時に有効に有効に働くときもある。

しかし、その逆もありである。

シンセティックマッシュルームの場合、そういうものをかえって極力排除して、その分の全精力を音楽に注ぎ込む。

どんなバンドなのかという事さえも気に掛けていない聴き手に、静かな佇まいからは想像できない、予想をはるかに上回る演奏力と曲で「あっ」といわせてしまうのだ。その音楽も奇をてらうことなく、自分達を音楽で表現する純粋性や必然性をバンドの随所に感じさせるのが印象的だった。

音づくりでは、自分達の描くイメージにあう音を探す作業を丁寧にやっているのだろう。演奏からは勢いをすごく感じるのに、ただの勢いだけの音づくりとは異なる音の重ね方がこのバンドのすばらしさでもある。

LIVE では、その作りこんだものをそのままステージ上に持ち込むのではなく、一音一音にきちんと自分達の思いを投影できているから自信を持

ってその音を発し、そこに思いっきりその時々感情を爆発させ、内に秘めているものを放出する。

CDなどの音源では、(4人ないし、3人で自分達の音楽を迫及し、作り込むという)バンドの醍醐味をすごく感じさせ、LIVE では、(その時々感情や雰囲気みたいなものを表現する) LIVE の醍醐味みたいなものをすごく感じさせるバンドである。

そこから視えて自分が何かをしようという思いはあるけれど、どうしても何か分からない時に感じる「無力感」、信じるがゆえに傷つく「やるせない」、それでも信じようとする「ひたむきさ」。そんな絡み合う様々な思いの中で揺れ動きながらも全てを受け入れようとするものの姿。それは、バンドのグルーヴに圧倒されながらも聴くものに切なさを訴えかけてくる。

10代の頃、周りの大人が明確な答えをくれなかった世の中の矛盾やいろいろな疑問を解くキーワードがロックの中にあった。そんな矛盾や疑問は10代だけの特権ではなく、大人と呼ばれる年代になっても形さえ変われど、消えることなく誰の心の奥にも潜んでいるものである。

子どもとも大人とも呼ばれる曖昧な立ち位置のいながらも、自分の目の前の出来事を曖昧にせず、一つ一つ答えを探し歩み出そうとする姿を描く『LIFE』という曲は、特に聴くものの心に入り込み、そんな心の奥に潜んでいる思いや、自分自身と向き合う空間を与えてくれた。

そんなシンセティックマッシュルームの音楽は彼らの等身大の姿でもあり、大人と呼ばれる年の今、等身大の音楽として聴きたい音楽でもある。